

中国医学と道教

(その二 太平経について)

吉 元 昭 治

さきの第八一回本会総会において、「中国医学と道教」について概説的な発表を行ったが、今回は、「太平経」にみられる、中国医学と関係する処についてのべてみたい。

周知のように、「太平経」は、後漢の干吉がえた神書「太平清領書」と関係があるといわれている。本書は、道教々典としては最古のものである。張角が創めた、「太平道」や、張陵の「五斗米道」は、ともに、道教のもとになっている。これら開祖者は、当時の戦乱にあきくれた世相を反映して、人々の病苦や飢餓を救うため、あるいは革命思想をもって布教に専念した。その布教の手段として、医療という方法を巧みに利用した。病人に自分の過ちを静かな室で反省させ、符水をのませた。その効がなければなお信心が足りないとした。また「九節の杖」というまじないを行

ったともいう。「五斗米道」では、三官手書という方法を行った。

今にのこる、「太平経」は、「道藏」にみられるもので、原書は百七十巻あったが、五十七巻にとどまっている。

道教は、現世利益、不老長生等をその大きな目的としているから、当然医学的部門が最も重要且つ最大な部門を占める。道教々典で最も古い形をつたえる、「太平経」についてその医学的部門を抽出、整理してみることは意義のあることと思われる。以下、項目にわけてのべる。

① 最もよいことは長生きで、わるいことは戦争、病氣、水害、火災で、飛仙昇天するのが願いだである。

② 気を重視した。天地、万物は気でつまれ、気を守けないでは生きていられない。

③ 精神気の考えを重要だとした。これらは、道教医学の呼吸法（現在の気功や、太極拳にまで及ぶ）を考えるのに重要である。

④ 一男二女がよいとした。人口問題としても興味がある。

⑤ 天は父、地は母、人は子とし、天地人の三位一体観

を強調し、天に順えば生き、逆えば死ぬ。地は母だから井戸を多く掘ったり深くしたりしてはいけないととく。

⑥ 長生きしたければ善行をするようすすめている。正しいことを行えば正気が多いから人は病気にならず長生きできるのである。人々がすべて正しい行いをしていれば、仙人は精霊を負って不老の方をさすげにやってくる。上寿は百二十歳と考えた。

⑦ 病因は、頭が疾むものは天氣が悦ばないため、足を疾むものは五行の気が争うため、四肢の病氣は四時の気が和さないため……。肝神が人体から去れば目がはつきりとしなくなり、心神が去ると皮膚は青くなり、肝神が去ると鼻が通じなくなる……。これらは、五行説にも関係し、「黃庭經」にもみられる考え方でもある。

⑧ 五臓のうちで最も重要なのは、心であるとした。心は火であり、火は貴いものである。心は神を司り、五臓の王でもある。火については、卷九十二、「万二千国始火始氣訣」とも関係し、古代ペルシャの「ゾロアスター教」の影響があるのではないかとされている処でもある。心に次いで脾を重視し、心は純陽で天に屈し、脾は純陰で地に屈

すともいつている。その他、蠱虫は人を殺すとか、三虫についてものべている。

⑨ 治療法については、「齋戒鬼神救死訣」では、卜卦、藥物、針灸、効（法に照して罰する）神に祈る。神をよんで悪い処をみつける等の七つの方法をあげ、夫々に長じた人をあつめて総合的に力を結集して万人の病を治すことがよいといっている。食事は少ない方がよく、たべすぎるのも、また全くたべないのもよくないとし、節食千日で腸胃は通じ病氣はなくなるといふ。最もよいのは風氣を食うこと、次は薬をとること、第三は少食であることを強調している。心理的療法として「符」があり、これを身に佩びたり、丹書してのむのがよいともいつている。精神的療法として、「守一」をあげている。一を守れば天神が助け、守一をしることを無極の道ともいつ、体と精神が一つになれば長生きできるといつ。また静かな室で、一心に、五面に夫々五騎づつ描いた五臓神を念じれば、五臓神は氣に応じて助けに来て、病氣を治すのだとのべている。また肝神、心神、腎神、脾神、頭神、腰神、四肢神はいつも空虚な静かな処にいて、齋戒して、香をたき、一生懸命念じれば百

病は消滅する。ここに内観、存思、坐忘の姿をみる。

その他、具体的な記述として、「草木方訣、生物方訣、灸刺訣、神祝文訣、方薬厭固相治訣」等があり、これらについても紹介したい。

(吉元医院)

中国古代医学における陰陽に

ついて

家本誠 一

中国古代医学はわかりにくい。その理由の一つは陰陽という言葉の概念がつかみにくいということに在る、と思われる。しかも、この陰陽という言葉は中国古代医学のあらゆる局面にしみわたって、此の医学の重要な構成要素となっている。それ故に、陰陽がわからなければ此の医学はわからない、ということになる。陰陽は中国古代医学を考えるものにとって、避けることの出来ない課題である。

思想史の上でも、陰陽は重要なテーマである。殊に易の基礎的概念として問題にされている。この場合、陰陽は先ず宇宙を構成する事物の分類原理であり、すべての物事は陰陽何れかに分けられる。次に、陰陽は物事の生成消滅の動因であり、運動(機能)の原理であり、その消長盛衰によって現象世界が成立する。